オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(20)
－アナログ対ディジタル(5)－

１．始めに

前報(18)に引き続き、アナログ音源とディジタル音源の比較を行ってみます。

２．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7 の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はバッハのカンタータ 140 番「目覚めよと我に呼ばわる物見らの声」に固定し、アナログ盤、CD、STAGE+から選択します。

アナログ盤

ARCHIV　198 407

Erhard Muersberger 指揮ゲヴァントハウスオーケストラ

1966 年録音

ARCHIV　198 407

Erhard Muersberger 指揮ゲヴァントハウスオーケストラ

1966 年録音

CD

LONDON（ポリドール）F35L-50510

ジョシュワ・リフキン指揮バッハアンサンブル

1986 年録音

STAGE+

カール・リヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団（アルバム）

３．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴結果

アナログ盤は LP-12、CD は EMT981、STAGE+は PC 経由で再生します。

Muersberger 指揮ゲヴァントハウスオーケストラのアナログ盤は 2 枚ありますが、装丁がことなり、一方はオリジナル盤、他方は再販盤のようです。オリジナル盤は Hamburg 製、再販盤は Hanover 製となっています。

Hamburg 製のオリジナル盤には、ヴィオリーノピッコロとか、オーボエダモーレとか、古楽器の使用の詳細な記載があります。ともに、合唱の分離はそれほどでもありませんが、ゆっくり目のテンポで、それらの古楽器の質感、通奏低音の音階、カンタータの女王と言われたソプラノのアグネス・ギ―ベルの清楚な歌唱が魅力的

です。音質は、Hamburg 製、再販盤で若干異なり、前者はソフトな感じ、後者はすっきりとした音になっています。
リフキン指揮バッハアンサンブルの CD は、1986 年のディジタル録音です。ディジタル録音らしい明晰さがあり、演奏も比較的新しいだけあって、後述のリヒターの演奏とはかなり異なり、切れのよい演奏です。
リヒター指揮ミュンヘンバッハ管弦楽団の STAGE+アルバムは、録音年代は不明でアナログマスターからディジタル化されたものと思われます。ゆったり目のテンポでじっくり聴かせる演奏で、オーケストラもソリストの歌唱もソフトでありながらフレッシュで非常に明晰です。

４．まとめ

収録年代と音源の種類と再生ルートが異なる音源が、一様にスピーカーアキュライザー導入以降、音質が向上し、CD 以外の録音年代の古い音源もフレッシュな印象で聴けるようになっています。

以上